

現代イタリアの音楽教育システムにおける歌唱教育についての研究

—Delfrati の普通教育機関と専門教育機関での音楽科教科書の比較をとおして—

大野内 愛

(本学大学院教育学研究科)

A Research on the Teaching of the Singing of Music Education System in Contemporary Italy: The Comparative Study of the Music Textbooks of School Educational Institution and Professional Educational Institution by Delfrati

Ai ONOUCHI

Abstract

In order to explore the present state of vocal music education within Italy's music education system, this paper surveys the content of textbooks used in specialized and non-specialized educational institutions and, with reference to the educational philosophy of Delfrati, considers how the objectives and significance of vocal music education vary according to institution type. Results reveal that the main objective of vocal music education in Italy is to acquire an awareness of pitch. Although this objective is the same for both non-specialized and specialized education institutions, an examination of further objectives reveals differences between the two types of institution. Since non-specialized educational institutions aim to foster love for music and the ability live alongside it, while specialized educational institutions aim to provide education that also strives to nurture musicians, the nature of vocal music education can be seen to vary according to institution type.

I はじめに

現在のイタリアにおける音楽教育には、一般の小・中学校など普通教育機関での音楽教育と、音楽院などの専門教育機関での音楽教育が存在する。筆者はこれまでイタリアにおける普通教育機関での音楽教育に焦点を当てて研究を進めてきた。その結果、普通教育機関での音楽教育では、音楽自体を目的とするというよりは、音楽を手段として扱う傾向が強く（大野内 2012）、イタリアにおいて音楽文化が根付いている根拠は、普通教育機関での音楽教育には見当たらなかった。特にオペラ発祥の国であるにもかかわらず、歌唱教育については、音楽科教科書において扱われている分量が非常に少なく（大野内 2009）、イタリアの音楽文化、特に声楽による音楽文化の発展には、普通教育機関の音楽教育だけではつながらないのではないか、と考えるに至った。

したがって本研究では、教育活動の一端を担う教科書に焦点を当て、普通教育機関での歌唱教育と、専門教育機関での歌唱教育の比較を行い、イタリアのもつ音楽教育システムにおける歌唱教育の内容や目的を明らかにすることを目的とする。

II Delfrati の歌唱教育への考え方

1 Delfrati について

本研究で扱う 2 点の教科書は、ともに Delfrati, Carlo が著したものである。

Delfrati はイタリアの音楽教育学者であり、中学校での音楽科と文学の教師を経て、バルマヤミラノの

音楽院で音楽教育学を担当していた。イタリア音楽教育学会 SIEM (Società Italiana per l'Educazione Musicale) の創設者であり、ISME (International Society for Music Education) の運営委員会も歴任していた。1978～1979年と1999～2001年には、国家の学校におけるプログラムの草案を考えるための委員会でも活躍しており、音楽教育に関する著書も多数出版している。イタリアの音楽教育において重要な人物の1人である。

2 Delfrati の歌唱教育への考え方

彼は特に著書の中で、「初見での歌唱教育のための80の練習」(Delfrati 1989, pp.149-167)を提案している。ここで彼は、初見で歌唱教育を行うにあたり、19の視点から80の練習の方法を紹介している。主に教師と子どもたちがどのように関わっていくかを中心に記している。前書きでDelfratiは「Dalcroze, Willems, Ward, Kodály, Orff, Martenot なしにはイタリアの音楽教育学は語れない」(Delfrati 1989, p.146)と述べているように、この80の訓練の内容には、そうした有名な教育学者の理論が含まれている。

この訓練の中でDelfratiが子どもにつけたい能力としては、①聴覚による音高感覚(音高弁別能力)、②読譜力、③音高再生能力、④和声進行の基礎が挙げられる。そうした能力を、教師と生徒との関わりの中で、つまり教室の中で培おうとするのが、Delfratiの方法論である。特に④の能力については、歌唱活動の中で扱わなければならない内容ではないように思われる。しかし、これを実際に歌わせる中で教育することにより、その感覚を体験させることができる。

その他の特徴として、この訓練の中で、Delfratiは子どもたちに何度も旋律を読ませたり、書かせたり、真似させたりしており、さらにこうした訓練を繰り返している。また、どの作業も、教師から子どもへ、子どもから教師へ、という単調な方法ではなく、1人の子どもに代表で歌わせて、他の子どもがその歌唱のポイントのチェックに当たるなど、指導的な面からも成長を促しているように思われる。

Ⅲ 教科書の内容

本研究において扱う教科書は以下の2点である。

[A] *I colori della musica* (Delfrati 2004) [B] *Il pensiero musicale* (Delfrati 2005)

この2点は、同じ時期に、同じ出版社(Principato出版)から出版され、ともにDelfratiの著書である。[A]の教科書*I colori della musica*は、普通教育機関での中学校の音楽教育用に出版されたものであり、[B]の教科書*Il pensiero musicale*は専門教育機関での音楽教育用に出版されたものである。この2点における歌唱教育に関わる部分を比較することにより、その内容や目的の違いを明らかにする。

1 歌唱活動部分の構成

表1 各教科書の歌唱活動部分の構成

[A] <i>I colori della musica</i>	[B] <i>Il pensiero musicale</i>
<ul style="list-style-type: none"> ・声と耳 ・旋律 ・3つの音を歌おう ・4つの音を歌おう ・5つの音を歌おう ・6つの音を歌おう ・音階を歌おう ・和音の中で歌おう 	<ul style="list-style-type: none"> ・声の学習 ・初見で歌おう ・5つの音を歌おう ・7つの音を歌おう

[A]の教科書では、歌唱活動については8単元に分けて構成されている。どの単元でも、説明の後、演習が掲載されており、学んだことの確認ができるようになっている。

[B]の教科書では、歌唱活動を4単元に分けて構成している。歌唱活動については説明も十分な量があるが、演習の量が多く、例として挙げられている曲数もAより多い。

2 教科書における歌唱活動部分の内容の検討

2.1 *I colori della musica* (2004) の内容

①声と耳

ここでは、歌唱活動を行う前段階として、まず音を記憶することの必要性について述べている。記憶は集中力との関連があり、その集中力を使って音に注意を払ったり自分の声を聴いたりすべきだと説明して

いる。さらに歌唱活動の中で音程が狂うことについて、その理由を示している。具体的な理由としては、子どものときから歌っていないこと、もしくは、歌っているときに自分の声や周りの音に集中していないことを挙げている。逆に、声をしっかり使い、さらに集中して声の良い使い方をすれば、正しい音程で歌うことができると主張している。

そこで、Delfratiの主張する「声の良い使い方」について、その掟を以下のように10点示している。

- 1 どんな音でも、始めの音をよく聞き、よく考えること。
- 2 叫ぶことなく、常に軽快に歌うこと。
- 3 のびのびとリラックスすること。顔や頭や首が硬くなるのを避けること。
- 4 喉をよく開き、優しく、小さく音を出すこと。喉を閉ざし、固くして歌わない。
- 5 歌う前に呼吸を大きくすること。歌う間は早く吐く。
- 6 肺の空洞すべを使って息を吸うこと。特に肩をあげるなどして上の部分だけを使わずに。
- 7 胸郭がすぐに落ちてしまわないように息をはくこと。緊張させずに、胸郭を上げたまま保つ。
- 8 歌詞の音節を明るく発音すること。ほそほそと話したりせず、また「食べている」感じにしない。
- 9 音節をよくつなげること。しゃっくりのように歌わない。
- 10 すべての音を正確に扱うこと。サイレンのように音から音へと滑らさないように。

この掟を守り、声という楽器を使って、「自分の音楽的能力を最大限に使おう」と述べている。

演習内容としては、1つの音を1人で歌うというものが紹介されている。リズムは自由だが音は1つの音で固定をして歌う。自分で音を保てるようコントロールするための練習である。

②旋律

まず、「旋律」という言葉について、音の高さの変化の連続であると説明をしている。旋律の音を正しく歌うためには、耳で音の進行を区別する能力が必要であり、音の進行の方向には、高い音になる、低い音になる、同じ音のままである、という3つの可能性があると示している。演習内容としては、ここではまだ五線譜を読むということはせず、図を用いて音高の理解をさせようとしている。図1に示すような図を用いており、線の上をファ



図1 「旋律」の演習1

の音として、この点に音高をつけて読む練習を行っている。
次は自分で音高の違う2つの音を選択し、その2音で図2のように、点に音高をつけて歌う。また、単に歌わせるだけでなく、クラスの中の1人が歌っているのを聴いて、図2のA～Cのどの図形を歌っているのか、他の生徒たちが考える作業も含まれている。

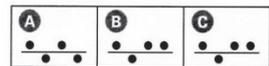


図2 「旋律」の演習2

さらに生活環境に目を向け、現在生活している環境の中で、低い音を出すもの、高い音を出すもの、低音から高音までさまざまな高さの音を出すものの3点について、列挙することも勧めている。

③3つの音を歌おう

ここでいう3つの音とは、ドレミの3つの音を指している。実際の楽曲の初めの部分の楽譜を提示し、まずこの中には3つの音高しか存在しないことに気付かせている。

演習としては、まず教師が「Ta」と発音しながらこの3つの音を用いて簡単な旋律を即興で歌う。これを生徒は耳で聴き、同じ旋律を階名唱で歌う。ここで初めて階名を使用している。耳で聴いて階名で歌えるようになったら、次は楽譜に記された、3つの音でできた旋律を階名唱する練習を行う。

④4つの音を歌おう

ここでいう4つの音とは、前部分のドレミにソの音を加えたものである。この4つの音だけでできていた旋律を歌う練習をする。練習をするために、新たな楽曲を示している。ユニゾンで歌えるようになったら、カノンにして歌うよう指示している。

また、前の「3つの音を歌おう」の部分で行った演習に加え、さらにこの4つの音を用いて、生徒にも即興演奏するよう促している。

⑤5つの音を歌おう

ここでは、前部分のドレミソにラの音を加えた5つの音を扱っている。前単位とは異なり、この5つの音で成り立っている音楽の効果を感じ取らせている。また、新たに加わったラの音の特徴として、ソに向

かおうとする傾向があると紹介している。さらに五音音階に触れ、この音階は特に東洋の音楽でよく使用されるということを紹介している。ここで具体的に示しているのは、中国の歌である。

さらに発展的な内容として、この五音音階を使って創作することを勧めている。この5つの音ならば、どのように並べても曲になり得ると注記している。演習内容としては、前単元に加え、新たな練習として、提示されたリズムに自分で音をつけるという創作的内容が加わっている(図3)。ここで使用するのは五音音階の音の5つの音である。逆に先に音だけ提示されて、リズムを創作するという練習も掲載されている(図4)。

⑥ 6つの音を歌おう

6つ目の音は、ファである。演習としては、これまでの内容に加え、新たな演習内容として間違い探しという演習がある。

黒板に書いた短いフレーズを教師が歌うが、その中の1つの音を教師はわざと間違えて歌うので、生徒がその音を当てるという作業である。

⑦ 音階を歌おう

これまで学んだ6つの音に、最後のシの音を加えて音階の学習につなげている。ここでは、シの音が導音であるということを説明し、導音の特徴として、緊張感の濃い不安定な音であること、シの後にドがくると解決して安心する音であることを示している。ここで例として挙げられているのはカノンである。この単元の目的は、導音がどのような働きをしているのか体感することである。

演習内容は、これまでの内容に加え、新たな内容として、音階の7つの音の中から4つの音を指定し、その4音だけを使って即興演奏させるという演習がある。これ以外の音を使わないようにという注意も記されている。

⑧ 和音の中で歌おう

これまでは個人もしくは全体で歌うことが前提であったが、ここではグループに分かれて学習を行う形になっている。

演習内容としては、まず3つのグループに分かれ、自分のグループに与えられた音列を歌い、全体で和音をつくるという練習が掲載されている。また2つのグループに分かれて指示された和音の音列を歌い、その和音の進行による雰囲気の違いを感じ取るという演習もある。これはドミナントで終わる場合とトニックで終わる場合の効果の違いに着目したものである。また発展的な内容として、3つのグループに分かれて書かれている音を歌うという演習がある。1つの音を変化させるだけで、和音の雰囲気や効果が変わってくることを体感させるための練習となっている。

⑨ 確認問題

歌唱活動の部分の最後に確認問題が載っている。歌を歌う際に重要なことをまとめさせたり、楽譜を階名唱で読む練習などが掲載されている。また、教師が演奏した旋律を書きとる(聴音)という練習もある。

2.2 *Il pensiero musicale* (2005) の内容

① 声の学習

はじめに、声は全員が持っている楽器であり、この楽器があればどんな音楽も作り出すことができる、と示している。この声の学習をすることのメリットは、人としてのコミュニケーションをとるための準備ができることだと筆者は言っており、その理由として、感情と声に関連しているからだと主張している。全員が声という楽器を持っているが、その楽器の音色はそれぞれ特徴があり、秘められている可能性も違うため、それぞれ自分の声を上手に利用して生かしていく方法を学ぼう、と述べている。

さらに声にはどのようなことができるのか、音楽的な4つの点から考えている。まず1点目は、音高であり、声によって音を高くしたり低くしたりできる。2点目は強弱であり、強い声をだしたり弱い声を出したりできる。3点目は速度であり、速く話したり遅く話したりできる。最後に4点目は音色であり、例として、澄んだ声、鼻にかかった声、のど声、かすれた声、くもった声、鈴のような声、甲高い声、鋭い声、響きの良い声、反響する声などを挙げている。

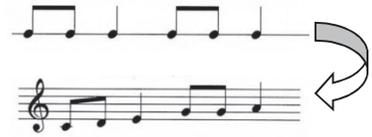


図3 「5つの音を歌おう」の演習1



図4 「5つの音を歌おう」の演習2

こうした声を作っている器官についても、この部分で触れている。キーワードとして、喉頭、声帯を挙げ、声の出る原理を詳しく説明している。また、そのほかの重要な器官として横隔膜を挙げ、呼吸をするときの横隔膜の動きについて説明している。肺全体を使っての呼吸を繰り返し練習するよう勧めている。

歌を歌う際の予備知識として姿勢のことについても触れている。まず、リラックスが大切だと述べており、リラックスすることは演奏を行う上で重要なものもちろんのこと、他のさまざまな活動でも基本となることだと主張している。さらに体をほぐすための体操の方法も簡単に紹介している。その他に、息を吸ったときは肩を上げないこと、息を吸うときには肺の下の方に息を入れることを注意点として挙げている。それだけでなく、その逆のことをわざとさせることにより、歌いにくい呼吸になってしまうことを体感させている。また発声の基本として、息から声に変えていくという練習も行っている。

その他に、母音の形についても述べている。口の形を変えて「Ah」以外の母音をつくるが、大切なのは口の形が変わっても、同じ音、同じ響きで歌うことだという記述もあり、声楽的な視点からも注意を促している。

さらに息のコントロールの方法についても簡単に示している。「Ah」の母音だけでなく、その他の母音でも息のコントロールで強弱をつける練習をするよう書かれてある。

ここまでで、音の高さと強さについて別々に学習したが、最後に、それを同時にコントロールさせるという演習が含まれている。表2を使い、いろいろな高さ、強さの音を出す練習をするよう記されている。たとえば4のセルならば、小さい声で上行音型を歌うという方法である。

表2 高さ強さに関する演習

INTENSITA'	ALTEZZA				
	acuta	media	grave	ascendente	discendente
piano	1	2	3	4	5
mezzoforte	6	7	8	9	10
forte	11	12	13	14	15
crescendo	16	17	18	19	20
diminuendo	21	22	23	24	25

②初見で歌おう

まず、歌を学ぶ方法として、耳で聴いて学ぶ方法と、楽譜を見て学ぶ方法の2つを紹介している。特にここでは後者に焦点を当て、説明をしている。

初見で歌う練習をする前に、音階のド～シの7つの音について、その特徴や特別な名前を紹介している(表3)。特にソからドへの進行に注目するよう促しており、図を示しながら、ソの音のエネルギーや進行性について簡単に説明している。この学習によって和音の理解についても、学習がたやすくなる、と一文を示しているが、ここでは和音についての詳しい説明はなされていない。

また、この部分では、調性についても説明されている。ただしここでいう調性とは主にハ長調とイ短調といった、調号がつかない調のみを扱っている。16世紀からの西洋音楽は長調か短調かで書かれているが、20世紀の西洋音楽には無調のものもあると述べている。

また、実際に初見で歌う練習をする前に、レガートとスタッカートについて述べられている。Delfratiは歌唱の基本はレガートであると主張している。音が中断されることのないように、すべての音はできるだけ長く保っておかなければならないと示し、本来のレガートとは、その音の長さを最後まで演奏することだと述べている。しかし、時に作曲家は音の中断を要求することがあり、その方法を2点挙げている。1点目は音と音の間に休符を入れること、2点目はスタッカートを用いることである。これに関連して、スタッカティッシモについても紹介している。特殊な場合として、対立関係にあるレガートとスタッカートが同時に書かれている楽譜を提示し、こうした場合の演奏法についても詳細に述べている。

ここで、初見で歌う際の注意事項を8点示している(右参照)。

演習内容としては、3つの音でできた旋律、4つの音でできた旋律を階名唱すると

表3 音の名前と特徴

度	名前	表現上の特徴
1	ド 主音	土台、最終的な安定性、まとめ
2	レ 上主音	ドに向かう
3	ミ 中音	安心、仮の安定性
4	ファ 下属音	ミに向かう
5	ソ 属音	エネルギー、緊張
6	ラ 上属音	欠乏、慎重、ソに向かう
7	シ 導音	もっとも不安定、強くドに引きつけられている

- 1 拍子の中で強勢をつける
- 2 楽器の助けを借りずに音を合わせる
- 3 音が不確かになったとしても、止まらずに読み続けること
- 4 初見のものも階名を使って歌うこと
- 5 心の中で声を出さずに歌を歌うこと
- 6 心の中での歌唱と実際の歌唱を交互にすること
- 7 記憶して練習すること
- 8 聴いた音を階名にして口に出すこと

いう内容がある。初めはドレミの3つの音のみを用いた旋律を歌う。次はドレミソの4つの音でできた旋律を歌うが、ここではオクターヴ下のソやオクターヴ上のドの音も加えている。

それ以外の演習内容として、創造的な領域では、示された音列の音を用いての即興演奏を求めている、その旋律にレガートやスタッカートを加えて演奏するよう指示していたりする。また、初めの2小節のみ提示されており、その続きを作曲するという演習もある。またこの作曲の演習に関連させて、ソの音がドの音に行こうとするエネルギーについても一度説明している。その上で、ソの音で終わっている旋律の続きを作曲させて、どのように終わらせれば「安心」の雰囲気を出せるのか、考えさせている。

さらに合同練習と称して、クラスの1人が「Ta」のシラブルで指定された音だけを使って即興演奏したものを、他の生徒が階名唱するという練習や、黒板の五線譜に指定された音を使って1人の生徒が好きな音列を書いたものを、他の生徒が階名唱するという練習、逆に1人の生徒が「Ta」で歌った旋律を黒板に書く練習を行っている。

また、3つのグループに分かれてドミソの和音を歌う練習も含まれている。その他に、間違い探しもある。黒板に書かれた旋律を、1人がわざと1ヶ所間違えて歌い、その間違いを探すという練習である。さらに1つの旋律を2人でペアになって読む練習をし、2人一緒に歌うだけでなく、1小節（もしくは2小節）ごとに歌うのを交代して練習するという方法も提示している。

③ 5つの音を歌おう

ここでの5つの音とは、五音音階のドレミソラである。導入として、キーボードの黒鍵だけを使用して五音音階を確かめている。五音音階の特徴として、半音の欠如が挙げられている。半音が重なることを「攻撃」と表現し、これを避けるように組み立てられている、と紹介している。また、この5つの音を使えばどのように組み立てても伴奏をすることができる」と述べている。

演習として、五音音階でできた短い旋律を階名唱する練習がまず掲載されている。これまでで扱った旋律よりも、使用されている音符の種類が増えている。

創造的な内容に関する演習として、前単位と同じく、指定された5つの音を用いて即興演奏をしたり、旋律の続きを作曲したりする。また、リズムが提示され、5つの音を用いて好きなように音を入れるという練習もある。それ以外の合同練習と称された演習については、前単位と同じである。

④ 7つの音を歌おう

③で学んだ5つの音にファとシを加えた7つの音について学習している。この2つの音は緊張感をもっている音であり、不安定な音でもありとし、他の音に動こうとする動力が働くことを説明している。このことに関連し、長2度と短2度の音程関係についても説明している。さらに長調の音階の音程関係についても触れている。この長音階の音程感覚を身に付けるために、初めに書かれている旋律を、だんだん音を上げながら読んだり、下げながら読んだりする演習が紹介されている。

創造的な内容に関する演習としては、音階の中から指定された音を使って自由に即興演奏するというものがある。またすでに示されている旋律の続きを作曲するという課題もある。それ以外の合同練習と称された演習については、前単位と同じである。

3 各教科書の特徴

3.1 *I colori della musica* の特徴

歌唱活動の第1歩として、集中するという点を挙げている。音楽の基礎的な内容や、発声の際の姿勢の在り方などよりも、まず集中することの重要性を述べていることは、学習規律にも気を配っていることが考えられ、特徴的なことである。そのことに関連し、音程が取りにくい生徒についても触れている。我が国でもそうであるように、普通教育機関には、「音高はずれ」と呼ばれる生徒が存在する。集中することの重要性を、そうした生徒へのアドバイスとしても用いており、すべての生徒が前向きに学習に参加できるよう促している。

また、「声の良い使い方」として、10の掟を示している。その内容とは、①集中することの重要性について、②発声時の姿勢や呼吸の方法について、③発音について、④音の運びについて、という4点にまとめることができる。

この歌唱活動の演習の中に、「われわれの生活環境」に目を向けるよう指示している部分があるという

のも、特徴の1つである。音の高さを理解する単元において、身近にある音の高いもの、低いもの、音
が変化するものを生徒に考えさせている。このことにより、音高を考えることが、決して日常生活とかけ
離れたものではない、ということが実感できるだろう。

またこの歌唱活動において、いきなり五線譜を扱わないことも、普通教育機関での教科書として、生徒
への配慮が見られる部分である。線の上に点で示したものや、ネウマと呼ばれる階段のような線で示した
ものを用いて、音高を視覚的に捉えられるよう工夫されている。

さらに、単元ごとに扱う音を決めて演習などを行っているが、その中でその単元には関係ないにもか
かわらず共に学習することのできる内容についても、少し触れながら演習が進められていることも特徴的
である。特に、カノンになり得る旋律の提示が2回見られた。単元としては、カノンを学ぶことが目的
ではないが、ここでカノンに触れておくことにより、今後学習を継続していく中で、ポリフォニーや、ハー
モニーの学習を行うにあたり、効果的な体験ができるはずである。

3.2 *Il pensiero musicale* の特徴

専門教育機関で使用される本教科書の特徴としては、まず声のことについて学ぶ意義について示してい
ることである。声と感情は関連があるということから、Delfratiはその意義を、「人としてコミュニケーション
をとるための準備」と述べている。

次に、発声に関する器官についての内容が詳細であることも特徴の1つである。歌う姿勢や呼吸につい
てはもちろんのこと、喉頭、声帯、横隔膜など、器官の名称を具体的に挙げ、その使い方についても説明を行
っている。歌う姿勢や呼吸については、わざと歌唱にふさわしくないことをさせ、それがいかに歌唱に適して
ないかということを感じさせている。実際に体験させて理解させるという指導の方向性がみられる。

発声器官について詳しいことと同様に、声楽の専門的なテクニックについても触れていることは特筆す
べき点である。具体的には、「息から自然に声に変える」ことや、「Ah以外の母音でも同じ響きになるよ
うに」といった注意や、「歌唱の基本はレガートである」といった記述がそれに当たる。このことは声楽
を学ぶ上で基礎的なことではあるが、最も重要なこととも言える。こうした専門的な視点からの記述がみ
られることは特徴的である。

その他に、音階中の1つ1つの音の特徴について表していることも、内容としてはより専門的である。
音の特徴というのは、つまり和声の進行の学習にも関わる部分である。こうしたことを理解させることに
より、音高を感覚的にとるのではなく、和声の進行上から音高を考えることのできる生徒を育成してい
きたいという考え方が見られる。

また、各単元の中で、単元の目的とは関係のない内容についても触れられている。たとえば、調性につ
いて学習している中で、「20世紀には無調のものも現れてきた」との記述が見られた。無調についてここ
では詳しく説明しているわけではないが、こうした内容に触れておくことで、これから先、音楽史などを学
習する際に効果的に働くだろう。また、単元が進むにつれて、提示されている例題の楽譜に用いられて
いる音符がだんだんと複雑になっていることも、これに関連している。この単元は、音符や音価の学習が主
ではないが、単元が進むにつれ、そうした面でもレベルアップしており、段階的な指導をすることができる。

さらに、本教科書では、実際に生徒が演奏者になり得るということを想定した内容が盛り込まれている。
たとえば、レガートとスタッカートとの学習の中で、こうした記号についての学習は普通教育機関でも行う
が、本教科書では、そのどちらもが同時に存在する図を示し、考えさせている。実際、楽曲の中には、相
反する記号が同時に介在している場合も少なくない。これはその中の一例ではあるが、その演奏法につ
いて詳しく説明していることは、演奏家の養成を視野に入れた教育の一端を担っていることを感じさせる。

本教科書で、専門教育を受ける生徒に求めている能力の中に、「聴いた音の高さを認識できること」が
ある。絶対音感まではいかなくとも、楽器で出されるすべての音域の音について、その階名がわかるこ
とが求められている。これも音楽家としての特殊な能力であろう。

最後に、本教科書では、すべての単元において作曲活動が含まれている。与えられた音で作曲や即興演
奏をするなど、演習の中での創造的内容は非常に多い。また、内容的みでも、単に好きな曲を作曲するだ
けでなく、途中までできているフレーズの続きを作曲するなどの工夫が見られる。こうした演習では、フ
レーズのつながりや和声(音)の進行を感じながら作曲せねばならず、単に好きな音を並べることよりも
高度な能力を求めている。

IV 総括

本研究では、イタリアの音楽教育システムにおける歌唱教育の現状について探るため、普通教育機関と専門教育機関の教科書の内容を概観し、Delfrati の歌唱教育観とも関連させて、歌唱教育の目的や意義が、教育機関によってどのように異なるのか、ということについて考察を行った。

その結果、まず筆者の Delfrati は歌唱教育の中で、歌唱の技術そのものの向上は求めていないということがわかった。Delfrati 自身は、歌う姿勢や呼吸の方法、歌い方など、声楽の専門的な知識を理解し、説明をしてはいるものの、具体的なテクニックや感情をいかに表現するかなど、歌唱表現の演習はほとんど行っていない。声楽の技術を身に付けるというよりも、音高感覚を養うことを目的としている。

教科書においても、声楽の専門的な知識についての記述は見られるが、演習になると、主に音高感覚を身に付けるための学習を行うことが多い。このことは、普通教育機関の教科書でも、専門教育機関の教科書でも共通しており、歌唱教育の部分では、いかに良い声を出すか、ということよりも、いかに正しく音高を理解するか、ということに特化しているように感じられる。

実際、歌唱教育の目的の1つを音高感覚の育成とすることは、Delfrati だけが行っているわけではない。筆者はこれまでの研究において、現在イタリアの普通教育機関で使用されている音楽科教科書を16社分析したが、歌唱教育の内容については、音楽理論の学習や音高感覚の習得が大きな割合を占めていた。今回の研究により、専門教育機関での歌唱教育でも、やはり主な目的としては音高感覚を養うことであるということが明らかとなり、つまりイタリアにおける歌唱教育の主たる目的は、ここにあると考えられる。

しかし、普通教育機関と専門教育機関の教科書には、音程感覚の習得以外の目的に大きな相違がある。

まず普通教育機関の教科書は、生徒の生活環境と音楽とを結び付けられるような内容が盛り込まれているのである。また普通教育機関は、音楽が好きな生徒ばかりではないため、音楽に興味をもつことができるような文章の書き方や、音楽を苦手だと感じている生徒（音高はずれの生徒や、五線譜が読めない生徒）に対する配慮などが見られる。したがって、普通教育機関の歌唱教育の目的の1つは、普段の生活の中に音楽があるということに気付かせること、音楽を嫌いにならず、音楽とともに生きていける生徒を育成することであると言える。

それに対して、専門教育機関での教科書は、普通教育機関での教科書よりも内容が深いのはもちろんのこと、演奏家の養成を意識した内容になっている。例えば、歌唱技術についても、演習部分にはほとんど扱われていないにしろ、より専門的な内容が記載されている、こうした実技的内容は文章だけでは理解しづらいのが特徴でもあるが、専門教育機関には、声楽専門の教員が存在するはずなので、そのことを前提とし、声楽専門教員からのサポートも期待できる状態であるので、こうした専門的な内容にも踏み込むことができるのではないだろうか。また、音高感覚の習得という目的を達成するという点から考えても、専門教育機関での教科書では、感覚的な習得というよりは、知識を備えた上での習得を目指していると言える。さらに、相反する記号の同時介在の場合の演奏方法など、触れる程度ではあるが、やはり演奏家を育成するという視点が濃くみられる。

以上のことから、イタリアにおいて歌唱教育の目的は、音高感覚の習得が主なものであると考えられる。これは、普通教育機関のみならず、専門教育機関においても同じことが言える。しかし、その先にある目的としては、この2つの機関は異なる考えをもっている。つまり、音楽を愛し、音楽とともに生きていける生徒の育成を目的とする普通教育機関と、演奏家の育成を視野に入れた教育を行うことを目的とする専門教育機関という形で、学び分けが行われているということである。

【引用文献】

- ・ Delfrati, C. (1989) *Orienti di pedagogia musicale*, Ricordi.
- ・ Delfrati, C. (2004) *I colori della musica*, Principato.
- ・ Delfrati, C. (2005) *Il pensiero musicale*, Principato.
- ・ 大野内愛 (2009) 「イタリアの中学校音楽科教育の現状—教科書の分析を中心に—」 広島大学大学院教育学研究科修士論文。
- ・ 大野内愛 (2012) 「イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷—1894年から現在までのプログラムに着目して—」 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』 第61号, pp. 333-342.